

[別紙⑦]

Q Uテスト結果の比較から考えられる児童の実態について

○実施目的

児童の自己実現能力の育成をより良く図るために、児童に対し心理テストを実施することで教員による児童理解を視覚的に促し、学級や児童について校内連携を進める。

○実施内容

Q Uテスト（年間2回（6・11月）の心理テストを実施）

○実施方法

1回目のテスト実施後、4つに分けられるプロット図の位置から2回目実施後の位置と比較し、心理状態が向上した児童（A群）、心理状態が横ばい・下降した児童（B群）の2パターンを抽出し、対象となった児童の様子（生活面・学習面の様子、学校行事での様子、家庭環境や気になること及びつまづいていることなど）を担当に聞き取りキーワード化する。A・B群の両方でどのキーワードが頻出したかを分析することで、実践の反省の手がかりや今後の取組の重点として活かす。

○実施結果

【A群（心理状態が向上した児童）の特徴】

- ・日々の授業や学校生活の中で、「自分の努力していることを周りに認めてもらった」、「他者のために自分が土台となって働き支えたことにやりがいを感じた」、「学校行事の中で憧れていた役割に抜擢され、一生懸命に取り組んだこと」を回答した傾向が多い児童ほど、心理状況が向上した。
- ・今年度は異学年縦割り班での特別活動を実施した経緯より「友だちとの関わりの中で、交友関係がさらに広がった」という意見もA群児童の多くから上がったことから、特別活動の取組を工夫することで児童の心理状況を向上させることにつながることも分かった。

【B群（心理状態が横ばい・下降した児童）の特徴】

- ・低学年では生活面における児童同士のやり取りの食い違いからトラブルに発展する傾向があり、特に「思い込みによる衝動的な喧嘩」がB群の特徴として挙げられた。
- ・高学年では、学習面における学力の積み上げに課題があり、特に用具教科の「国語科の語彙の習得に伴う読み書きの難しさ」、「算数科の四則演算及び数量関係の理解の難しさ」が挙げられた。

○考察

B群の低学年での原因の一つに認知面（何が問題でどのようにすれば穏便に解決することができるかを順序立てて整理して実行すること）の不足が挙げられることから、言語で処理することが難しい児童に対して絵や図を使った生徒指導を行い児童の自己指導能力の育成に努める。

B群の高学年では、まず語彙の獲得や四則演算の処理能力を高めるために入学の頃から技能を高める手立て（授業中の机間指導による進捗状況の確認、適切な補習課題の実施及び家庭と外部組織との連携）を行い、「自分の力で出来た」という達成感を味わえるようにしていくことが必要である。次に、数量関係の理解を促すために乗法の基礎概念である「1つ分×いくつ分＝全体の数」の仕組みを絵や図などを用いて確実に理解させることで、高学年の難解な学習単元を自力解決へと結びつけていく。